

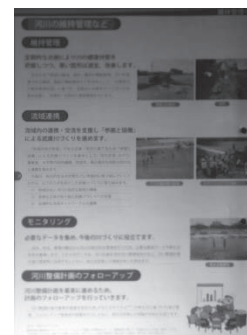
武庫川流域圏の環境と武庫川守による武庫川づくり

吉田 博昭・佐々木 礼子(武庫川づくりと流域連携を進める会)

はじめに

当会は兵庫県武庫川流域委員会を前身に住民参画型の流域総合治水の実現をめざす流域住民と行政のパートナー、中間支援組織団体である。同委員会が知事に提出した提言書にある、流域全体における住民主体の川づくりを担うことを目指してこれまで活動を続けてきた。これを武庫川守と称し、具体的には当会のシンボルマークに込められた武庫川を「知る、創る、伝える、見守る、協働、継承する」情報と人材のシンクタンクとして、行政と住民の間に入り双方のパートナーとなって住民をリードし、河川行政・流域自治体、大学、流域圏の武庫川に関わる企業や団体、個人などと連携し、住民主体の小さな川づくりを企画しながら武庫川の魅力から危険までを周知し、多様な生きものが共存できる河川環境を再生・創出し、安全で安心して暮らせる流域づくりを目指してきた。そのような住民参画型の流域総合治水の始動から10年の節目を活かして2017年2月と3月には「住民主体の川づくり」のスタートにむけたシンポジウムとフォーラムを開催した。現場レベルのフォーラムでは住民主体の川づくりのスタートを宣言し、嘉田前滋賀県知事と元国土交通省の宮本氏、井戸知事にご協力いただき大上段のシンポジウムを開催してそこに提起し、さまざま提言をいただいた。その際にそれぞれの立場から出されたさまざまな提言を活かして以後当会は活動を行ってきた。

流域委員会の提言書や県の武庫川水系河川整備基本方針・整備計画は、温暖化など環境条件の変化はあっても「参画と協働」の基本は変わらない。基本方針・整備計画に位置付けられた河川対策以外の流域対策や超過洪水対策は流域住民抜きでは実現不可能である。整備計画の基本理念には「地域共有財産」である武庫川を守り育てるためには「参画と協働」による武庫川づくりを基本にすると明記されている。「武庫川守」も「小さな武庫川づくりも」流域住民の参画手法の一つである。住民による「情報収集・行政へ情報提供」、行政の「情報公開」、互いに情報を正しく理解し、知識とバランスのとれた力を養い川づくりが実践出来れば何処にも負けない「武庫川づくり」ができると確信している。



方 法 …武庫川づくりと流域連携を進める会の主な活動

① 「知 る」 … 武庫川ウォッチング

川づくりのいろはの「い」として流域圏を歩き、生きものから河川環境、川を中心にしたまちづくりなどを視察し、武庫川の魅力、恩恵から危険までを知る。

生きもの観察を中心に始めた生きものウォッチングは、観察対象が広がり、生きものとは全く関係のないと思うような地質から防災対策工事現場にまで観察対象が広がり、環境と生きものや人の暮らしまでがウォッチングの対象になっている。観察記録は環境モニタリングデータとして活かし、同じ所へ何度行っても常に新鮮なウォッチングができています。



専門分野を異にする参加者が集い、得意な事を得意な人が説明するワークショップ形式で互いに新たな知識をお土産に持って帰り、時には地元活動団体に説明役をお願いし、組織的、個人的にもつながりが深まってきた。この面からも観察対象に広がりがあり「参画と協働」の川づくりの一端を担うウォッチングになっている。

② 「創 る」 … 住民主体の「小さな武庫川づくり」

2018年度は武庫川講座受講者が中心となり、「小さな武庫川づくり検討準備委員会」を設置して武庫川講座の企画4案を1年がかりで実践する。2019年度には武庫川守がリードして「小さな武庫川づくり検討委員会」を設置し、一つひとつ小さな武庫川づくりの実践活動を実現し、流域圏の環境再生・保全活動を積重ねることで健全な武庫川流域圏の水循環づくりをめざす。

③「伝える」…武庫のながれ、ホームページ、SNS、イベント参加などによる広報活動

流域圏ニュース「武庫のながれ」の編集発行・ホームページ作成等からの情報発信、イベント出展広報活動までを行う。情報発信ツールを住民と行政の懸け橋に、武庫川流域圏の川の実態から様々な双方の正しい情報を提供する。

パネル出展などPRの機会を活かして積極的に参加出展し、当会の活動紹介と併せて他団体との交流機会や新たな課題発見の機会として活かしている。例えば共生のひろばに出展した「クモとトンボの戦い」の写真を差して「どっちを応援する」の質問から喰うか喰われるかの生存を掛けた戦いにどちらにも与しても感情だけで自然に影響を及ぼす事のつたなさを学び、些細なことが学びの機会となって交流の切掛けとなる体験ができた。



④「見守る」…武庫川守

川守として最も重要な任務は平常時と緊急時の河川、流域圏の実態、河川環境のすこやかさ、水質の実態調査を行なうことである。

武庫川づくりに必要な情報収集や知識の習得はもちろんであるが、一番大きな特徴は現場を見て現場で出会った人の声を聞く「現場重視」で、現実抜きの机上の空論に走らないよう気をつけている。武庫川守といっても特別な事はしていないが、今武庫川で起きていることを「目で確かめ」、「現場の作業員に教えを請い」、「現場で巡り会った地域住民の声を聞く」、「何を求めて武庫川を訪れるか」、「アユの遡上や生きものは」・・・武庫川水系河川整備計画に盛り込まれた全ての項目を対象に時間の許す限り観察している。



川で出会った人と趣味の話、昔話、川で怖い思いをした話等、種々雑多な会話の中からそれぞれの武庫川への関わり方や関心事項が読み取れる。

武庫川守で得られた情報の発信や行政への情報提供など様々な取り組みをしている。

年によって遡上量に違いはあるものの、武庫川でアユの遡上を確認しており、何処まで遡上するのか、高温にも酸欠にも弱いアユが棲める環境があるのか2年掛かりで調査した。調査する毎に分からない事が増え結論には至らないものの、アユはアユなりに適当に移動しながら環境に耐えているのは確かである。

⑤「協働」…武庫川づくり懇談会、県主催のみんなで取り組む武庫川づくりへの参画

河川行政との懇談では、河川整備が流域委員会の提言書に沿い、最新の技術導入がなされているか、住民からの駆け込み寺として住民の思いを伝えるなど、また、行政と住民の連携による川づくりを誘導する。

河川行政主催のアユの産卵床づくり、観察会、武庫川づくり交流会など各種イベントへの参画。

武庫川流域圏ネットワーク「お掃除会・オオキンケイギク駆除」の取り組み、行政主催の各種行事、その他関連団体行事への協力・参加などここでも「参画と協働」の川づくりの一環として取り組み、連携重視の活動が出来ていると自負している。



⑥「継承する」…武庫川講座、市民カレッジなど

流域各市の市民カレッジでは武庫川に関する知識・情報を広く普及させる。

武庫川講座では川づくりリーダー「武庫川守」を養成し、武庫川の貴重な知識、継承と持続可能な武庫川づくりに向けた人財育成を行う。

確かな住民参加を川づくりに反映させるために、「武庫川流域圏ネットワーク」「武庫川市民学会」と当会の3団体は連携して流域住民と行政の協働による武庫川づくりに取り組んでいるが、活動の裾野を広げるべく武庫川づくりのリーダー養成をめざした「武庫川講座」を開催し次は実践講座に移行する。

おわりに

小さな武庫川づくりは、武庫川の現場に限ることではなく共生ひろばにもある。

他団体の高齢のリーダーは「安全で心地良い暮らしがしたい」だけでできる事をやっている。このように理解すれば自分自身が何しているか分からなくなるくらい幅の広い活動でも自信を持って続けることができる。来年の共生ひろばに向けてまた一年頑張ることができる。